
トラベラー

真田綾香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラベラー

【Nコード】

N5066U

【作者名】

真田綾香

【あらすじ】

歴史とは何故に勉強しなければならないのだろうか 何か楽しくすることはできないのだろうか 室町時代にタイムスリップしてしまった主人公の前で関ヶ原の戦いの幕が開ける

1文 過去

「…で 長篠の戦では…」

6時間目 とても眠い しかも歴史とくれば超面倒くさい
歴史なんか勉強して何の役に立つんだ そう思いながらも 6年生
になって半年

最初は楽しそう と思ったが それは最初だけで 鎌倉時代などと
室町時代などと ものすごく複雑になっていった

「はい 織田軍は何を武器にしましたか？はい 徳田君」

「はっ…！？」

急に自分の名前を呼ばれて飛び上がった しまった 全然話を聞いて
いなかった

先生は僕がずっと上の空であったことを見逃してはいなかった

「えっと… 今なんて…」

恐る恐る返すと先生は怒りっぱい口調で

「聞いていなかったんですか？織田軍は何を武器にして戦っていた
のでしょうか と言ったのですよ」

「え…っと…」

確か長篠の戦では徳川と織田と豊臣が戦ったよな と 思いながら
も 織田は何を武器にしたのかが分からなければ意味がない

「えっと…徳川…？」

自信なさげに応えると 先生はさらに怒りを増して

「違います！さっき言ったでしょう？！織田軍は鉄砲を使ったんで
すよー！」

「ぶっ だっせ 馬鹿じゃねーの？」

小さな声が聞こえ 後ろを向くが 皆っーんとして 笑いの渦に巻
き込まれる

「はいはいはい 静かに」

そして 何事もなかったかのように授業は進められた

『5時になりました 生徒の皆さんは速やかに下校してください』
流石夏であって 5時とはまだ明るい 皆が下校する中 友達が少ない僕は1人で校門を出た

女子が固まって喋っている 邪魔だなあと思いながら 少し強めに
「邪魔」

1言だけ言った

「なっ…！五月蠅い！馬鹿！」

女子の1人が怒って蹴りをいれてきた

「って…」

お返しと言わんばかりに砂を蹴散らした そして ダッシュで逃亡した

「明日：覚えとけ！馬鹿野郎！」

女子がそんな汚い言葉を使っているいいものか そう思いながら帰り道を急いだ

夕焼けが輝いた 鉄橋の下には川が揺らめいており 現代には少し昔っぽい一面もある

川原が下にあり そこまで坂道になっており 草すべりでもすればそのまま突っ切って川へダイブしそうな角度だ 高さは2〜3Mほどあり 落ちると頭を打って死んでしまいそうだ

「あーあ…」

下を向いて歩いていて ため息をついた

すると何か白い物が目の前を横切った

「あつ…猫…？」

顔を上げると 本当に白い猫が横切っていた 黒くないだけマシか
と思つて猫を少し小走りに追いかけた

いろんなことを考えていたのか 石に蹴躓いて バランスを崩した
「やばつ…」

足がもつれたまま 頭から川原に落ちていった

「いったあ…」

ゆっくりと 頭を起こした よかったどうやらケガはしていないよ
うだ

と

「浅井軍！東の陣地へ逃げ！」

「いいか！陣地を取られないようそのまま突っ込め！」

「は…？」

すぐ横を見ると たくさんの人が剣や槍を交じり合っている

「え…何…ここ…」

あの世で戦国時代の人だドンちゃん騒ぎでもやっているか と思い
頬をつねる

痛覚を感じ これは本物だと確信する

「お前…おかしな格好だな まさか忍びか？」

急に後ろから太い声が聞こえ びくつと肩を震わせる

恐る恐る後ろを振り向くとそこには――

「うわあああああああ!!!!」

思わず 叫び声を上げてしまった あまりにも偉大な人物が

「なななななでこの人がここに…?!」

「あ?そりゃ いるだろ」

「…分かった コスプレだ!」

「は?コスプレとは…?」

そんなことも分からないのか この大人は
だとすれば本当に

「…今つて 2011年…だよな?」

「…1600年…だが?」

1600つて400年も昔だ! 歴史に疎い彼は何もわからない

2文 片倉小十郎

「お前は…どこから来たのだ？」

政宗が秀秋の格好を珍しげに凝視する

「あつと…中国から…来まして…」

「中国？何処にあるんだ それは？」

「あーつと…」

戦国時代の中国ってどういう名前だったっけな… 記憶をたどり寄

せるも 真面目に勉強を受けていないので記憶に入っていない 確

か古墳時代らへんが隋…唐…とか？清とか元もあつた気がするが…

「えつと 日本に近くて 古くから交流をした…」

「ああ！明のことか！」

納得したように頷く

ミン？そんなのあつたっけなあとと思いながら「はい そうです」と

返す

「お前1人で来たのか？凄いなあ」

政宗は秀秋をじろじろと見て 刀を鞘にしまった

「おい！戦は中断だ！この明から来た奴をもてなせ！」

しばらく静寂が漂っていたが 1人の槍を持った兵士が――

「はい！筆頭！何があつたか分かりませんが…」

筆頭と呼ばれた伊達政宗は近くにいた男になにやら言った その近

くにいた人は普通の雑魚兵とは大違いの格好をしており 筆頭に近

い格好をしていた しかし筆頭よりかは貧相な格好で…

「あの人 誰？」

「…ああ 小十郎か」

小十郎？誰だそいつは？と 心の中で思いながらその小十郎という

人を目で追つた

「小さい頃からの俺の縛役でな ものすつごく強いんだ 片倉小十

郎って言うんだ」

小十郎は遠くにあつた白い馬を率いて こちらに戻ってきた

「おーいつ こっちだ！」

「…分かつてますって…」

小十郎は呆れたように小さく呟いた やがて2人の近くまで来ると

政宗が軽々しく馬に飛び乗った

「お前の馬も用意しようか？」

「馬なんて乗ったこと…」

馬なんて動物園とかである乗馬体験とかでしか乗ったことない…

いや 人生の中で1度も乗ったことが無いような気がする

「分かった なら俺の後ろに乗りな」

政宗は自分の背中を指でピシッと指した 秀秋は近づくも 高すぎ

るので乗れない

「なんだあ？またがりもできないのか」

すると 小十郎がサツと足に手をかけ秀秋を馬の上に上らせた

「高い…」

馬の体には何か変なものが敷いてあり 前を除くと馬の鬣がフワフ

ワと揺れた

「捕まっつてないと落とされるぞ？」

歩くだけなんだから大丈夫じゃないか？そう思つて油断したその時

ガタンつと体が揺れ 馬が走り出した時 バランスを崩し土の上に

落ちた

「あわわわわ…」

馬が急に止まり 政宗は慣れた手つきで馬を1回回らせ秀秋の方を

向いた

「…だから言つただろ」

「はい…」

小十郎が再び手で秀秋の足を押し 上に上らせる

「今度こそ 捕まっつて置けよ」

小十郎も茶色の馬に跨り 手綱を引いた

「今度こそ 捕まっつて置けよ」

体が揺れたかと思うと それはずっと続き 気持ちが良いような悪いような感じになった

風が髪の毛を巻き上げる 先ほどいた現代と時は同じく 夕方で日輪が大きくオレンジ色に輝いた

「日輪：太陽は世界のすべての人を同時に写す 今 同じ太陽を見ている人が沢山いるなんて…凄いとかわないか」

田に水が入っており 稲が少し生長している 風が水面を揺らし 水面に写っていた太陽の光がバラバラにされた

「…綺麗」

つい言葉に出してしまい 綺麗な景色を眺める

馬と車 断然車の方が速いが 馬ならではのいいこともある

「ところで お前の城って何処にあるんだ？」

「城っていうものじゃないけど 屋敷…か？」

「なんだ…」

もっと偉くて「殿ー！」とか呼ばれているのかと思ったら… 案外低かったんだな

暫く 馬に揺られていた すると 近くに大きな平屋の屋敷が見えた

「あー！もしかしてあれ?!」

腕を振り上げ 大きな屋敷を指差す その時 両腕を離してしまい

「おまつ…」

「あ」

気づいた時には遅かった 走りながらの馬から滑り落ち 尻を思い切り地面にぶつけた

「うわぁ…」

最近落ちるばかりするな そう思って ヨロヨロと立ち上がる 政宗は呆れた顔で

「お前 馬向いてないんじゃないか…？」

「う すんません…」

小十郎が降りようとしたが 政宗が止め 自分が先に馬に跨ると秀秋を引つ張り上げた

「大丈夫か？」

「ま、まあ」

打ったところを摩りながら 片腕で政宗の鎧を掴む

「頼むからもう落ちないでくれよな」

「はひ…」

3文 悲劇の過去

以外としつかりしていそうな漆喰の壁で シンプルだった 庭は銀沙灘と向月台があり 銀沙灘は規則正しく並んでおり とても綺麗だ 石畳が入り口まである

「降りれるか？」

「…当たり前だろ！」

秀秋は意地を張り、足を一生懸命動かし 降りようともがくが足が纏れて真つ逆さまに落ちた

ゴンつと 鈍い音がし 政宗と その他の人が目を瞑る

「…大丈夫か？」

「…うん」

すっかり元気をなくしてしまった秀秋はふてくされながらも、石で出来た数段の階段を上った

馬は小十郎が引き 小屋へと戻す為、別の方向へ向かった

「すつげえ…」

銀沙灘が夕日を浴びて輝いた そして ガラガラと昔ながらの音を立てながら 扉を開くと 現代には無い造りがあった

玄関が土で固めてあり 廊下は吹きさらしになっているのが1目で分かった 玄関の先には直径50？はあるつかと 柱が天井に向かっつてつき出していた

「こつちだ」

政宗は足袋を脱ぎ捨てると 音を立てずに ずかずかと縁側を歩いて行った 秀秋も慌ててその後を追う

すると政宗は前触れもなく、兜を取った 黒い豊かな髪が舞い上がる

「暑かったなあ…」

「ちよ…その眼帯ってなんなの？」

すると 政宗は顔色を変え、ビクツと肩を震わせた

「…なあ 教えてくれよ」

「お前 人に聞いて良い事と悪い事があるんだ」
「は…?」

歴史に疎いので 彼の過去は知らない

「なあ 教えてくれよ」

何度も秀秋は交渉するが 政宗は口を硬く閉じたまま 一言も喋る
うとはしなかった

「なら条件付で」

と 今まで黙っていた政宗が口を開いた

「え…?」

「つまり お前が俺のこのわけを知るのに対して お前がここに来
た理由を教えろ！」

ここに来た理由… 俺は明から来た事になってるから… 適当に考
えればいいか それで彼の過去が分かるなら

「乗った! さあ 教えるから教えろ!」

「ふむ… 中々物分りが良い子供だな」

政宗は目を細め 笑うと ある一室の前で止まった

「ここ」

障子を開けると そこには木の床壁に 甲冑が置いてあった 馬鹿
でかい蠟燭が2本 蠟燭立てに乗っている

政宗は鎧を脱ぎ、兜を棚の上に乗せると ラフな格好に着替え 部
屋の真ん中で胡坐をかいた

「お前も座れ」

「…?!」

言われるがまま、慣れない正座で政宗の正面に座った

「よし じゃあまず お前から離せ 嘘をついたら即、切り殺す」

秀秋はゾっとし声を張り上げ「はいいい!」と 声が裏返るほど叫
んだ

「その心がまえ いいな」

「…じゃあ 俺が来た理由は…」

なかなかいい文が見つからず 沈黙が走った 唾を飲み込んだ音が

「ってわけ」

「…自分でごついう風に語るのもどっつかよ…」

「まあ いいっていいって」

と 笑い飛ばした

4文 団樂

日もすっかり暮れ、蠟燭を灯した時だった。障子に人の影が映ったかと思つと、カタカタと音を立てて障子が開いた。

「…食事で御座います」

小十郎が廊下で正座をしていた。凄じ改まり様だな。と思ひながらも、痺れた足を動かす。

「分かつた、今行く」

いかにも、お腹が減つた動物のような顔をして、政宗は答えた。

「足痺れた…」

「お前正座もしないのか？ありえぬな」

正座なんて人生のうちで何回かしかしてないのに…ざつと20分くらい正座をしていたと思う。しかし時計はないので時間は分からない。

ふらふらしながら部屋を出ると、長い縁側を突き進んでいった。もう月が出ており、灰色の雲の隙間から黄金色の光がはみ出ている。光が銀沙灘に乱反射し、銀沙灘が光っている。とても幻想的な風景だ。玄関を通り過ぎ、そのまま真っ直ぐ進むと、襖が6つほどある部屋があつた。

中からはたくさんの方がいるようで、たわいもないお喋りが聞こえる。と、政宗がためらいもせず、襖を両手で開けた。

「…?!」

部屋は狭いような広いような、微妙な広さだった。しかし中には20〜30人の人が1つ1つある囲炉裏を囲っていたり、座布団に座り、家族で御飯を食べていたり。なんとも和む光景だ。

「あー！政宗様！今日の夕御飯は大根の煮付けですよっ！」

若い女性が台所から出てきて、笑顔で迎えた。

「…あれ？その子は…？」

女性が秀秋の方をマジマジと見る。

「あの…明…？から来ました…」

「ああー！なるほど！ならこの子の分の御飯も！」

女性はそう言つて 台所に戻つていった

政宗は一人で寂しく食べている武士が座っている囲炉裏を見、その方へと歩いていった

そして近くにくると

「お前 一人か？隣いいか？」

と 気さくに話しかける 武士は断ることもできず

「あ…はい！どうぞ…」

そして安心したように座布団に腰をどすつと降ろす

秀秋もそろそろと座布団に座る 幸い足を下に下ろすことができたので、正座をすることはなかった また正座をするようなことになつたら足が死んでいたかもしれない

「今日は…すまなかつた。」

政宗が頭を深々と下げる 武士は一瞬睨んだが、すぐに冷静になり「…確かに…悲しいですけど…でも1人や2人逝つたくらいで悲しんでられません 天かをとるならそれくらいの犠牲は払わないと…」と 悲しげに微笑んで見せた 武士は無理やりの笑顔を必死で作っている

「…良いように言わなくても良いんだ」

ちよつとしんみり来た時、囲炉裏の火がこつちに音を立てて飛んできた

そしてさっきの女性がおぼんに乗っている御飯を横に置いた

「わっ…！つと 有難う…御座います」

「礼儀正しいね！」

女性はニツコリと笑うとちよつと欠けている箸を秀秋に渡した

政宗はまだこの武士と話をしている

「ちよつと 政宗様 食べてくださいよ！」

「あ 悪い 今食べるからさ…」

茶碗を手に取り 口に運ぶ

「美味しいですか？」

女性がおずおずと聞く

「美味いっ！」

秀秋も 自分もと、欠けた箸で御飯を口に運ぶ

「…美味しい…」

現代の味とは違う 新鮮な感じで モチモチしていて 水分があつて つるつるしていて…

「こんな美味しい米 初めて食べた…!!」

感動した 昔の食べ物には化学製品も入ってなくて 安全で… しか
し味は落ちるが…

人々も仲良く…すれば良いのに…

5 文 星

大きな白い満月が銀沙灘を照らした 星が空いっぱい広がっており 流れ星でも流れそうだ

秀秋は縁側に寝っ転がり、星空をじっと眺めていた

「…綺麗だなあ…」

ほうつとため息を付くと 政宗が物珍しそうに秀秋の顔を覗き込んできた

「何している」

「うわあ！」

吃驚して飛び上がると 政宗はビクッと肩を震わせた

「びっくりしたなあ…もう」

「…こんな所で何をしておる」

政宗は辺りを見回した 何か面白い物でもあるのかと思ったようだ

「…星を見てたんです」

「…星なんぞ珍しい物でもないがな…」

濃紺の星空を見上げると 現代にはない美しさが秀秋を圧倒する

「…明では星を見られんのか」

「ええ まあ…」

現代は人工の光源が多くなり 星の光を押しつぶす星は1等星などの明るい星しか見れない

「流れ星でも見れそう…」

「？ 流れ星 とはなんだ」

「…星が流れて…あ！」

と 説明しようとする 流れ星がキラッと南西の空を舞った 光の残像が現れる

「ああいうのを流れ星って言うんだよ！」

人生の中で数回しか見れない…というか見たことがないのだろうか？ 流れ星を見られて 秀秋は感動した

「…よく見るが」

「…あれが消える前に何か願い事を3回唱えたら願い事が叶うって言う…」

「…奇怪な」

政宗はもう1度、流れ星がこないかと空を見上げた

秀秋は目を擦りながら、再び寝つ転がった

「政宗は何の願い事したい？」

「呼び捨てかよ…俺の願いはただ1つ——」

そうか 流石——

「天下統一だ」

やはり 予想した通りだった

「そっか 叶うといいな！」

確か天下統一したのは…徳川家康だよな？と なんと…

秀秋は縁側に座っている政宗のほうを見た

この人は天下統一しない——

「ふぁ…眠…」

普段ならいつも起きている時間？のはずなのに…

何故か 眠い…光がないせいかな？

「すまん ならちよつと待ってる」

政宗はそう言つて 障子をスパンツと開け 押入れのような所から

少し黒い布団を取り出した

「あれ…？もう1枚なかつたっけな？」

そう言い、空っぽの押入れを覗く

「あー…1枚しかないんだつたら…寝て良いよ」

「いや ダメだ 客にそんなことはさせねえ」

まだ諦めないのか 押入れを覗く 流石に諦めたようで 小十郎を

呼ぼうとしたが 規則正しい彼はもう寝ているだろうと のことで

断念した

「布団がないんだつたら…俺が座敷で寝るしかないか…」

「いや いいつて 僕が…」

2人とも遠慮がちに 布団を譲ろうとする で 結局

秀秋が布団 政宗が座敷ということになった

「…いや 本当にこっちでいいの…?」

「たまには座敷もいいかもな」

政宗ははつと笑うと、黙った

「じゃあ おやすみ」

「…明ではそう言うのか」

「一応ね」

いつかバレルだろう そう思いながらも 瞼を閉じた
いつか打ち明けなければいけないのか?

僕が未来からきたことを

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5066u/>

トラベラー

2011年7月14日17時45分発行